「谷川士清の会」ってなーに？

谷　川　士　清
(1709～1776)
津市の生んだ偉大な国学者。「日本書紀通証」や日本初の五十音順国語辞典「和訓栞」の名著を著した。八町には士清が医者をしていた旧宅が残っている。また、近くの福蔵寺には墓もみられる。

私たちの「谷川士清の会」は、平成11年１月津市教育委員会の計画による「谷川士清の顕彰と保存を進める会」をうけて、翌月２月27日に市政との協働という形で発足した市民グループの会です。現在60名近くの会員が研究、研修、啓発の三部会に分かれて運営しています。

現在のところ保存事業は市で行われており、私たちはもっぱら顕彰運動とそれに伴う八町街道（旧伊賀街道）の町おこしを主眼として事業を計画してきました。発足してまだ１年ですが、まず谷川士清の人となりと、その業績を知ってもらおうと種々のメディアを使ってＰＲしてきました。その結果、今まで市民の方々に殆ど話題にされなかった国文学者であり、医師の「谷川士清」についてようやく温かい目が向けられるようになりました。

いま、会の事業としては、第一に市内の小学四年生を対象に、５校で約600人の生徒にお話とビデオ、日本で初めての五十音順の国語辞典「和訓栞」……江戸時代の和綴じ本を紹介し、士清の業績を知ってもらおうと努力しています。この会員分担による出張講座は、これからも毎年続けてゆきたいと考えています。

次に、旧宅の西方にある神納町に土地を借り、士清の本草学を学ぼうと長谷山、経ガ峰の麓の薬草を採取し、薬草園を育てようとしております。この他、多方面の活動、研究を続けておりますが、詳しくは会報の内容をご覧ください。

津市の生んだ「ことすがさん」を誇りとして後世に伝えたく、会の趣旨にご賛同の上、入会して頂ければ幸いと存じます。(連絡先：TEL 059-228-9264　増田 孝)　〈増田〉

「士清ソーレ」

「ソーレ」は太陽。すなわち谷川士清は心のよりどころである。谷岡経津子顧問主催する“わ”の会から「県民文化祭に谷川士清を打ち出す」との年度早々の企画提案があった。私たち「谷川士清の会」の一貫した思い『県レベルでのアピールの必要性』と合致した事が大成功の要因ではなかろうか。

八町は芸どころ。地元の賛同を得て多方面に発信する目的で、詩を一般公募したもの。10月31日（日）総文センターで、紀平次子氏舞う会場は、さながら花爛漫の絵模様のよう。「士清ブーム」に火がついたの感あり。〈若林〉

改訂された「小伝」

三ツ村健吉先生講演

９月18日、市立図書館で行われた市民公開講座で、故七里亀之助氏の「谷川士清小伝」を元に一部改訂、加筆・修正を行ったことについて、三ツ村先生から「私の見た谷川士清」が語られ、会員だけでなく一般市民の多数の参加があった。

主な内容は次のとおり。

1、家系図では、谷川家の後裔の方が伊勢市などに在住であること、士清の妻山下氏も、後妻の松木氏もともに京都の人であること。竹内式部をかくまったのは谷川士清ではなく、蓬莱尚賢に嫁した長女八十子ではないか。４代目以後からは産婦人科医ではなく鍼灸医であった。

2、略伝では、京都遊学の年齢が従来12才となっていたが、正式の遊学は21才（享保15）であろう。
26才で帰郷。洞津谷川塾を開き、家業の医者を継いだ。

3、彼の業績は、前半生では家業の傍ら神代記までしかなかった『日本書紀』全編の実証的な通釈書を自力で成し遂げたこと。それが『日本書紀通証』35巻。その第１巻の付録「和語通音」は、わが国の言語学史上初の「動詞の活用図表」となった。

後半生の大著は、『和訓栞（わくんのしおり）』93巻。わが国最初の50音順で完備した国語辞典。